KÔKÛTISIKI

航空知識

第七巻

[illegible]

滯　歐　雜　記　帳　（その十六）

工學士　山　本　峰　雄[1]

12. 南獨の旅

8月も半ばを過ぎると9月に行はれるニュルンベルヒの黨大會の準備が進行し，其のプログラムも定まつて日本人にも參加申込みの勸誘があつたりした。黨大會參加者のバッヂの意匠も發表されて黨大會だけは豫定通り進行し，それ迄は何事も無く平和な日が續く事と思はれた。消息通を以て自任する伯林の邦人駐在者は黨大會が終つて軍隊と黨員が其の隊に復歸した頃が最も危險であると說明して呉れた。又或る大商社の人々は獨逸人の間に行はれて居た巷說其の儘に戰爭は絕對に無いのだから安心したらよい等とも慰めて呉れた。

平和の氣構へと戰爭の雲行とが交錯して人々が落付かない氣分で街々を往來して居た8月17日の午後4時40分，私はミュンヘン行きの特急でアンハルター驛を出發した。

旅行の目的は，航空研究所の長距離機の映畫をB. M. W. 會社で公開する事に在つた。長距離機のフイルムは既に數回伯林で獨逸航空界の人々に見せて居た。伯林に着いた翌日親友W氏の骨折りでデーレンドルフ廣場のウーファー會社の試寫室でやつたのを最初とし，獨逸航空省の映寫室で第2回目の映寫をやつた。此の時は航空省技術長官ウデット將軍の智腦と云はれるルフト技術大佐を始め；10數人の航空省技術課の連中が集つた。第3回目は獨逸航空研究所見學の際にトムゼンザールでボック敎授以下20數名の所員の人々に見て貰つた。第4回目は伯林のN. S. F. K. 本部でブランデンブルグ分區長以下の顏見知りの人々の希望に依つて本部の團員に披露した。

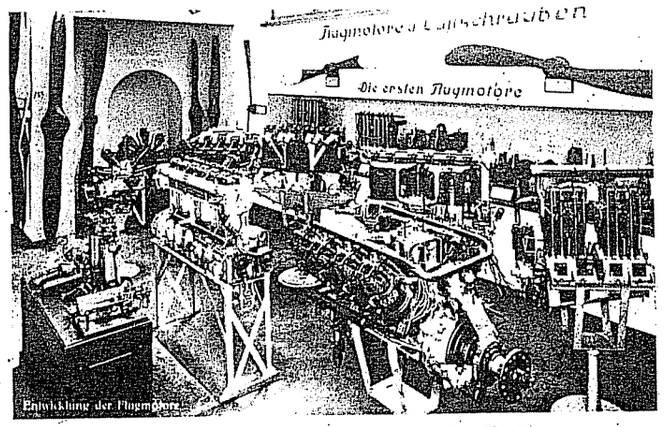
ミュンヘンでの公開は獨逸で第5回目の映寫であつた。

ディーゼル機關車に曳行される我々の流線型列車は平均時速93粁で，獨逸の平原を南下して居た。車內はニュルンベルヒの黨大會の準備に向ふ黨員が大多數を占めて居た。赤い環の中にハーケンクロイツのマークを浮かした黨員章を付けた人々が，或は平服で或は黨員服で乘込んで居た。中には外側に柏の環を金色に浮かした功勞章を付けたアルト・ケムプファーも混つて居る。伯林からはライプチッヒに停車したのみで，暮れ行く南獨の平原の夕景色を眺めて居る內にニュルンベルヒに着いて車內は急に空席が增した。豪華な淡茶色のクッションが室內燈の光を受けて，所々にわびしく殘つて占められた座席からはいびきが洩れて來た。午後11時40分私は1ケ月振りで再びミュンヘンの主驛に下り立つた。タクシーを驅つて指定されたホテル・フィーヤヤーレスツァイテンに旅裝を解いた。

18日の朝は陽光も輝しく明けて昨夜は靜まつて居たホテルに斯くも多數の人々が泊合せて居たかと思はれる程の人々が食堂を賑はして居た。B. M. W. 會社のK氏は朝食が終る頃を見計らつてやつて來て再會の挨拶を交はして今日の打合せをした。今日はB. M. W. 本社の大講堂で200人主な人々を集めて4時から映畫をやる事にしてあるとの事である。そして午前中は休養して貰つて晝食を終つた後に2時頃からB. M. W. の重役S氏と會つて長距離機の說明をして貰ひたいとの事であつた。聽講者に說明をするのはS氏の方がよいであらうとの事であつたので下手な獨逸語を自分でしやべるよりもと思つて萬事委せてしまふ。閑になつた午前中はK氏と別れて見覺えのあるミュンヘンの街に出る。黨運動の發祥地としてのミュンヘンの町は既に1ケ月前に可成り詳しく訪ねてあるので有名な市廳を見に行く。街行く人々はバイエル特有の服裝の男女が多い。綠の帽子に鳥の羽毛を飾り，革のパンツを肩から吊つて無骨な毛脛を出して歩いて居る若い男，大きな襞をつけた肩飾りと赤く細かい花模樣のスカートを着けた少女等昔乍らの狩獵人の風俗は無邪氣で快活で人のよいバイエルの人々の健康な顏貌に相應しい。靑銅色の壁に白く古びた屋根と庇を重ね，中央に色樣々な人形が廻つて高らかに時を告げる大時計が掲げられて居る市廳舍はミュンヘンの昔からの名物である。市廳の前の通りは市民が溢れて居た。人の中を縫つてミュンヘン名物のエーデルワイスの押花を入れた小さな柱掛けを購ふ。紫の地紙にアルプスの名花エーデルワイスの花三輪を押して「總統の愛花」と書いてある。私の心は急にミュンヘンの南，ヒットラー總統の山莊のあるベルヒテスガーデンや總統の遊ぶケーニヒス湖を訪れて南山嶽地帶の雄壯な景觀に接して俗塵を洗ひたい思ひで一杯になつたのである。山の空想に浸つて街を歩いて居ると遙かに峨々たる山々が白雪を僅かに頂きに殘して紫に淡く煙つて地平線の彼方に連なつて居るではないか。私は早速ホテルに歸るとクラークを捉まへて南行きの遊覽バスの順路を訊し出發の時間と，場所等を聞き明日のバスに座席を申込んだ。

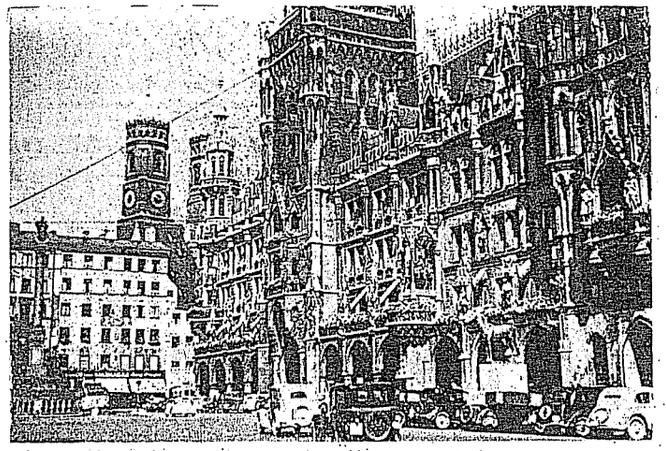
第1圖　ミュンヘンB.M.W.會社本社

K氏は再び私を訪ねて2人で食卓に向つた。食卓には電氣式蒸燒機が持込まれ雛鷄が大きな金串に刺されて硝子の窓の中で回轉し始めた。脂を餘り落さない爲に回轉速度が調節されてある。落ちた脂は器に集めて再び上から掛ける。溫度は自動的に階段狀に變化する。獨逸らしい料理のやり方である。K氏は此の機械を客の前に披露する事が

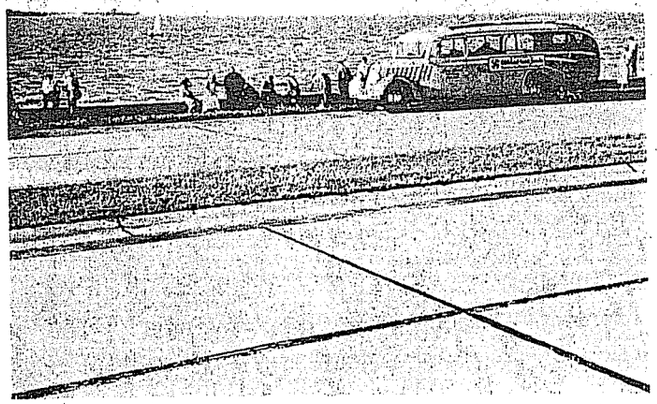


第2圖　ミュンヘン獨逸博物館に於ける航空機發動機室

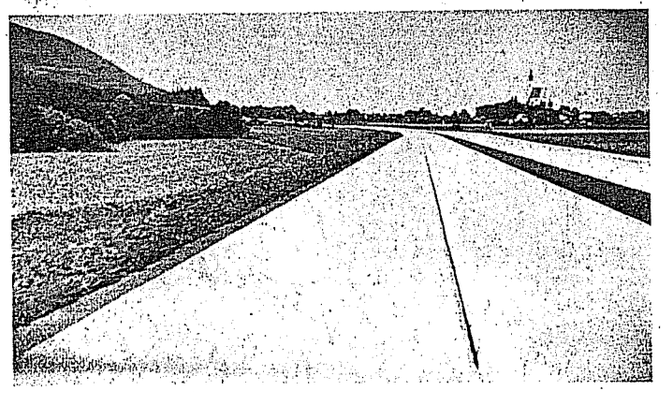
（1）航空研究所



第3圖　ミュンヘン市廳（著者）



第4圖　ヒーム湖畔の國營自動車道路駐車場（著者）



第5圖　ミュンヘン・ザルツブルグ間の國營自動車道路（著者）

得意らしく機械の説明をしながら樂しげに狐色に變化して行く鷄の肌を見守つて居る。彼が特許審査官であつた時代に此の機械の審査を行つて特許の實施迄世話を燒いたのだと聞いて，彼が得意がるのも無理はないと思つた次第である。

2時に我々はB.M.W.の白亞の本館を訪れた。1月前にニュルンベルヒの飛行場から空軍のユンカース52型機で着陸した飛行場は左手に遙かに伸びて例に依り野外繫留の飛行機が點々として飛行場の裾に並んで居る。重役S氏の部屋に集つたのはK氏と之も顔見知りの若いエンヂニヤのH君とS氏の秘書であつた。S氏は日本の田園人の如く逞しく朴訥な顔付をして肩幅が廣くてたくましい感じの人であり，K氏は太つて淺黑く陽に燒けて居る。H君は嘗つてB.M.W.のソヴィエツトの分工場に働いた事のある現場技術者であるが，之は其の經歷に似はず工科大學を出た許りとも見える若く謙讓な人柄である。

S氏は既に前以て送つてあつた長距離機のフイルムの英文タイトルを獨逸語に譯してタイプしたメモを揃へて居た。其のメモに依つてS氏は更に技術的の細部の質問を出して私の答を書入れて行き1時間許りの後に草稿が出來上つて直ちにタイピストに渡された。

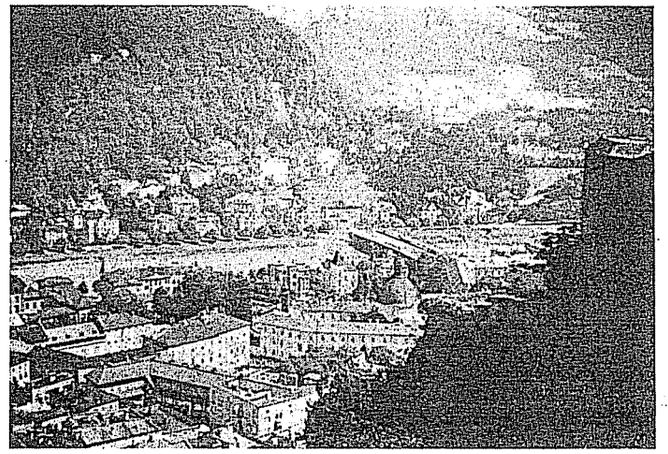
午後4時に私は工場の中の大講堂に案内された。7月の暑い最中に我

々は此の工場を訪れて航空發動機やオートバイや自動車の大量生産を見學し又アラハの森林中に設けられた大規模な航空發動機の修理工場を訪れた事があるのである。私は長い見學旅行の當時を思起すのであつた。

講堂の中には既に本部工場とアラハの修理工場からの技術者200名が席を占めて居た。中央演壇の下にはB.M.W.Ⅸ型發動機が置かれてあつた。今日集つた人々に配布された講演會のビラを渡された。日獨の國旗を交叉して長距離機の飛んだ木更津，銚子，太田，平塚のコースが畫かれ「日本の偉大なる業績」と云ふ見出しで記錄の事其他が詳しく書いてある。

S氏の紹介で私は立つて聽衆一同に挨拶をしなければならなかつた。挨拶の初めは日本流に頭を下げ，終りにはナチス流に右手を擧げて挨拶とした。S氏が長距離機に就いて技術的の説明を行つた。B.M.W.の發動機が日本に於て營々たる研究を行つて改良され，遂に驚くべき小さな燃料消費量となつた點，世界記錄の樹立の價値等は特に聲を高くして技師達に訓す樣に勵ます樣に說いた。

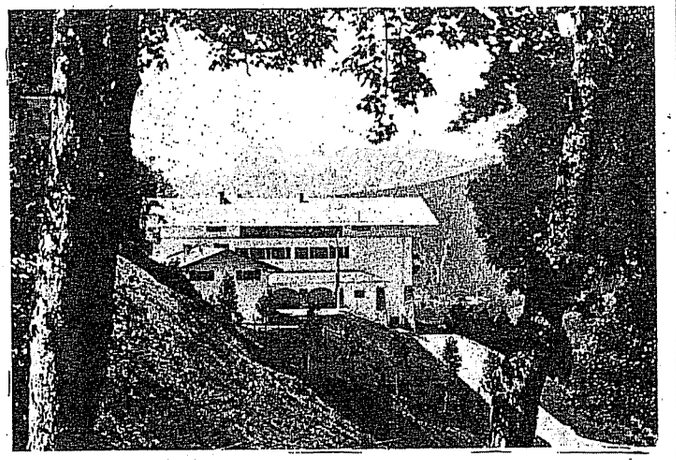
1時間に亘る説明が終つた後で，フイルムが映寫された。私にも幾度見ても懷しい映畫である。故國に在る人々の懷しい顔も出る。思出多い大森の工場の製作の經過が出る。1つの場面には突如藤田中佐の飛行服姿が大映しに現はれて私はいつもの樣に再び暗い氣持に捉はれてしまふのであつた。私が獨逸で藤田中佐が行方不明になつたと云ふ暗號の樣な



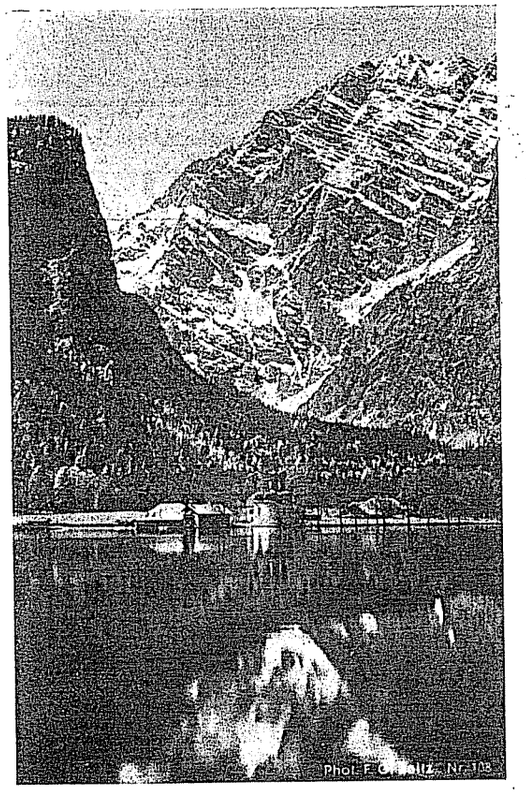
第6圖　ザルツブルグ市（著者）

報知を受取つたその時は，氷雨の降る暗い朝の伯林の宿の一室に眼をさました時であつた。其の日は又獨逸軍がズデーテンに侵出して間違へば歐洲の動亂を捲起しはしないかと人々が恐れ戰いて居た時である。ズデーテン侵入の獨軍の成功を祝ふハーケンクロイツの長旗が家々の窓から出されて氷雨にしとど濡れて居た。

私には窓から見える此の旗さへも暗澹たる弔旗の如くに見えたのである。故國出發の時に書いて呉れた紹介の名刺の幾枚かは未だ使はずに殘つて居た。麻布の綠に圍まれた料亭での送別會の時に



第7圖　ベルヒテスガーデンのヒツトラー山莊



第8圖　ケーニヒス湖

會つて紹介の名刺を書いて貰つたのが最後であつたのだ。彼は私の後から歐洲に渡つて歐洲の飛行大會に出場して紅毛の操縱者と輸贏を爭つて見たいと云ふ念願を持つて居たのであつた。私は歐洲で中佐に會へる望みを伯林の宿で實現出來る樣な氣持でさへ居たのであつた。思出は遂に盡きず，私は悲しい思ひに包まれて了つて，午後迄の數時間を再びベッドに潜込んでしまつたのであつた。

思出を辿つて居る內に映畫が終つた。S氏の挨拶で會は閉ぢられた。講堂を出た私は工場內の空中殉職者記念碑の前に跪いて，國の如何を問はず航空の發達の爲に身を捧げた人々に對する感謝の念を新たにしたのであつた。

K氏とH君と私の3人は工場を出でS氏に別れて夕食を共にし，やがてミュンヘンの古いワインステューベにくつろいだ。何十年かを經たテーブルの並べられた古い部屋に3人が卓をかこんで話ははづんだ。技術の話から勢ひ國際情勢の話に移りソヴィエットに行つた經驗の有るH君からソヴィエットの航空技術の話等を聞いてから，更に話は獨ソの關係に及んだ。黨員章を着けたK氏は，獨ソの關係はイデイオロギーが異るのみであると主張する。私は今迄獨逸人の誰からも聞いた事のない此の主張は最近現はれたものであらうか等と考へて見たが，話の內容は少しも具體的でないので別に深くも氣にはとめなかつた。

此の日から丁度4日目に獨ソ不可侵條約が締結されて，我々在留邦人は勿論，世界を驚かしたのである。

斯くて若い我々は云ひたいだけの事を云ひ合つてホテルの前で別れた。

翌日早く私は1人で停車場近くの遊覽バスの發着場でケーニヒス湖行きのバスに乘つた。同車した人々は數人の突擊隊員とミュンヘンに來た遊覽客である。私は突擊隊員と共に最後部に席を取つた。後部は寫眞を取るには最も都合のよい位置である。

開閉式の屋根を持つた我々の流線型大型バスはミュンヘン環狀線から國營自動車道路に入つて時速70粁でザルツブルグに急いだ。伯林＝ミュンヘン間の自動車道路とミュンヘン＝ザルツブルグ間の自動車道路は，最も景色のよい自動車道路とされて居る。バイエルの綠の平原の中に坦々たる「白き路」が南東に伸びて居る。走る事1時間半にして自動車道路の駐車場近くの谷の上に掛つた橋梁の上で30分の休憩がある。我々は自動車道路の傍道に下りてピーチパラソルの點綴する休憩所を散策して歩いた。道路の中央の芝生は朝露を置いて居る。乘用車を持てる遊覽客が朝露に濡れた芝をなびかせて，高速度で我々の前を横切つて

行く。

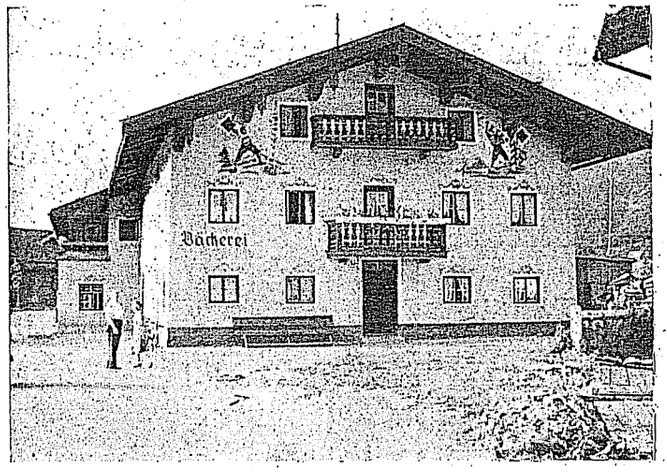
再び車上の人となる。走るに從つて前面と右側に峨々たる山が迫つて來た。憧れの南山嶽地帶の邊緣の山々である。山裾には廣い綠の原野が擴がつて牛が放牧されて居る。敎會の尖塔や白い壁の中に突出でた窓を設け，窓に紅白とりどりの花を植えたバイエル特有の美しい家々が原野の中に點綴して居る。繪の樣な風景である。峯々に去來する白雲を車窓に眺め，やがて國營自動車道路最大のラストハウスであるヒーム湖畔のホテルを過ぎる。道路の兩側にはホテルの建物や駐車場や華かなテラスやヨットハーバーが並んで，鷗の如くに帆を張つたヨットが走つて居る。ヒーム湖は冷く碧黑い湖面を碧空の下に光らせて居る。駐車場の堤には車を泊めて湖を眺める人々が群れて居る。湖岸に生繁る葦の葉先きにヨットの帆が滑つて行く。

ヒーム湖の岸をかすめて東行する事40粁バートライヘンハルで國營自動車道路は終つた。此處からザルツブルグは指呼の間に在る。

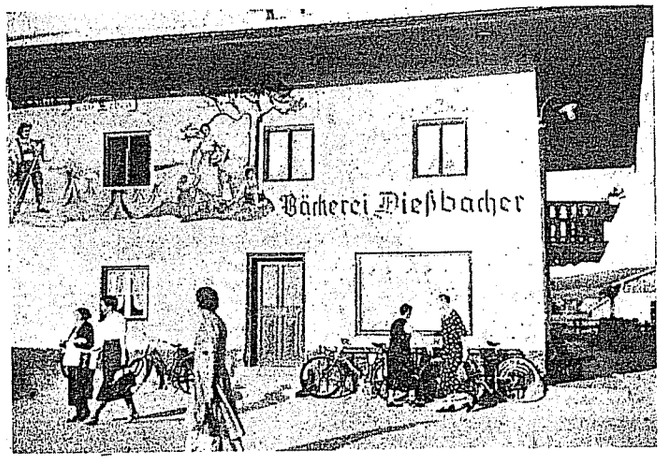
樂聖モツァルトを生んだ舊オースタリの古都ザルツブルグの町並みは狹く亂れて居た。何か黨の催物があるらしく，ハーケンクロイツの旗が町を飾つて突擊隊員が制服で往來して居る。

町の中央の廣場でバスを捨てゝ急坂を上り，セントペータース墓地に山腹に設けられた昔の王室の洞墓を訪れ，更にケーブルカーでベルグハイムに登る。ミュンヘンの都會人や獨逸の農夫等雜然たる色彩の中に樂しい旅の雰圍氣がかもし出される。英國の青年の傍若無人な駄辯が無ければケーブルカーの中は更に樂しいであらう。嘗つてミュンヘンのホーフブロイで我々に乾杯を強いて來た英國の青年の醉眼等を思出して，祖先の拓いた國力を利用して人無きが如く橫行する現代の英國人に憎惡を催したのであつた。

山の上から見るザルツブルグはドナウの支流ザルツアツハ河の兩岸を挾んで容貌魁偉な山々に圍まれた美しい町である。テラスに休んで晝食を取り，更に徒步で裏路を下つて再びバスに乘込む。



第9圖　インツエルの民家（著者）



第10圖　インツエルの民家の壓畫（著者）